

説苑

サー・ジェイムズ・ステュアートと

マツキー教授(一)

田 添 京 二

はじめに

一 ステュアートの学生生活

二 エディンバラ大学の教授たち(以上本号)

三 マツキーの横顔

四 教授としてのマツキーと学生ステュアートのえたもの

はじめに

ステュアートの経済学体系が、稀有ともいふべき鋭い歴史意識と発生的手法を大きな特徴としていること、いなむしろ、そのことよつてのみ、みずからの体系性を確保しえたと判断すべきことは、一貫して私が強調してきた論点であつた。しか

―サー・ジェイムズ・ステュアートとマツキー教授―

しステュアートの場合、そうした経済学への理論的昇華に至る以前の、もつと広い基礎的な素養として、歴史学の相当本格的な蓄積があつたかに推察させる叙述は、『経済学原理』の随所にちりばめられている。

むろん、こうした歴史的素養は、スコットランド歴史学派に属する著作家たちが多かれ少なかれ共通に持つていたばかりでなく、当時の知識人の教養の土台が、古典学の上にすえられていたことの現われと解することもできよう。ただステュアートにあつては、処女作として世に問うたのがサー・アイザック・ニュートンのギリシヤ年代記の擁護 (*Apologie du Sentiment de Monsieur le Chevalier Newton sur l'ancienne Chronologie des Grecs, . . . 1757*) であり、一種の歴史研究であつた。これはスコットランド歴史学派のなかでも特異なデビューの仕方だつたといつてよい。

小論は、右の事情を念頭に置きながら、ステュアートが親しく師事したエディンバラ大学のチャールズ・マツキー教授 Charles Mackie, 1688-1766¹⁾ を紹介して、とり上げられることの甚だ少なかつたステュアートの大学時代に側光を当ててみようとの一習作である。

走りがきの講演草稿や、封蝋をはがすためにまず必ず破れて欠字のできる手紙を読むのは、私にとって少なからぬ *elbow grease* であつた。そんな時に私の初歩的な質問にいつも快く応じて下さつたエディンバラ大学図書館、手稿・貴重図書部の *Miss Marjorie Robertson* の御教示ほどありがたいものはない。記して謝意を表したい。

一 ステュアートの学生生活

ステュアートがエディンバラ大学の *College of Edinburgh* に入学したのは、一七二四〜二五年の冬学期中のことであつた。まもなく一七二七年の夏に、法務次官 (*Solicitor General*) をつとめていた父が、四十六才という働き盛りでなくなつた。このためにステュアートは一時勉学を中断せざるをえなかつたといわれている。

しかしこの不幸をのぞけば、彼の大学生活は、優れた師とよき友に恵まれて、充実した楽しいものであつたと思われる。彼は、母のアン (スコットランド法曹界で最高位の官職であつた高等民事裁判所長官をつとめたサー・ヒュー・ダルリンプル *Sir Hew or Hugh Dalrymple* の長女)、四人の妹、マーガ

レット、アグネス、マリアンヌ、エリザベスといつしよに、エディンバラ市の南郊、グッドトリーズ *Goodtrees* の館に住み、朝大学に出て、夜家に戻るといふ生活を送つていた。⁽¹⁾ このころ大学の正規の授業は、午前が八時から十二時、午後は二時から四時だつた。

言うまでもないが、学生がこういう形の通学を許されるというのは、当時のヨーロッパの大学の慣行から見ると珍しいほうに属する。この頃すでにエディンバラ大学は、ヨーロッパや植民地に広くその名を知られていて、外国や植民地からの学生を受け入れていたし、少なからぬ数のイングラント出身学生も居た。もちろんスコットランドの全域から学生は集つてきた。だから大学にはむろん学寮の施設があつたし、キャンパスの中に置かれた教授たちの官舎は、いつもかなりの数の下宿生をかかえていた。そしてこの下宿代が、教授たちの大切な収入源にもなつていたのである。けれども大部分の学生は、ステュアートのように、自宅からなり縁者の家からなり通学したし、市内に下宿していた、という。要するに、この限りでは、今日の日本の大学生の学生生活とよく似ていた。

この方式は、エディンバラ大学が、十八世紀のはじめに行な

った大改革のお手本が、このやり方をとっていたオランダの諸大学だったためといわれているが、私が思うに、この世紀の九十年代から、歴史家のロバートソン William Robertson 学長のもとで本格的にはじまる大建設に至るまでは、敷地も建物も貧弱で、全寮方式を採用する物的基礎そのものがなかったことも一因ではあつたらう。この頃大学をおとずれたあるアメリカ人は、「おそろしくみじめな古臭い建物、馬小屋に、と言われても首をかしげる……」⁽³⁾と評したくらいだった。

いずれにせよ、この通学方式にも見られるように、大学生活は極めて自由であつたから、イングランドから来た者の眼には放縦とさえ映つたらしい。この大学に四年間学んだあるイングランド出身学生は、寮に閉じこめるでもなく、イングランドのカレッジのような厳格な校則の下に置かれるでもなく、さらにはガウンの着用も強制しないことに驚いて「何かと用事もあれば娯楽も多くて、若者の勉強時間を奪ってしまう市街地のただ中にあるカレッジが、そもそも立派な学生を育てられるものだろうか」と批判した。ステュアートが入学する二年前のことである。

けれども、その馬小屋以下の校舎と市街地のさわめきの中か

ら、ヒュームやステュアートが、ロバートソンやボズウェルが、そしてデュゴルド・ステュアートやサー・ウォールター・スコットが巢立っていった。ステュアートは、暖かい家庭生活と自由な学校生活を、ともに享受しえたわけである。

さて、朝大学へ向うステュアートが、グッドトリーズの館からギルマートン通りへ出ると、早くも、今日ゴルフ場になつている広い敷地の彼方に、いちばんに朝日を受けるアーサーズ・シートの怪異な山容がまず眼にはいり、そしてその東のふもとには、よく西を向いたトカゲにたとえられるエディンバラの街が、トカゲの頭、つまりお城のある岩山を左端にして望まれたはずである。いまは巨大な天文台をのせたブラックフォード・ヒルに向つて半マイルほど下ると、南から首都に入る古くからの幹線道路に合する。そこから北へ向つてゆるやかな登りを二マイル足らず、昔から数えきれないほどのエッチングに描かれた、自然と人為のとけ合った美しい景色を見上げながら次第に市街地に近づく。ステュアートがかよつた頃の道の両側は、スコットランド独特の石積みみの壁で囲い込まれた牧野に羊の群が遊ぶ、という景観だったはずで、市街地に近づくにつれて、樹木に富んだ貴族や富豪の所領が多くなり、一マイル手前からよ

うやく屋並みらしくなってくる。大学は、ちょうどトカゲの左の前足のつけ根に位置していて、イングランド軍の侵入に備えて一五一四年から六〇年にかけて築造された「フロッデンの壁」が、キャンパスの南縁を限っていた。ステュアートが辿る大通りは、まっすぐその壁にあげられたポッターロウ門に導かれ、それをくぐった右手が大学の西門で、ステュアートの家からここまで、ほぼ二マイル半、歩いて小一時間の道のりであった。

ステュアートは、よく大学の親しい友達と連れ立ってこの道を歩き、そしてしばしば彼らをグッドトリーズの館に伴って帰っては、泊りがけの交友を楽しんだという。そうした友人たちのうちで最も親しかったのは、のちにグラスゴウ大学の高名な民法学教授となったリンゼイ Hercules Lindsay (or Lindsey) であった。リンゼイはステュアートより二年先輩、つまり哲学者のヒュームと同期の入学で、ステュアートが一七三五年に弁護士 advocate の資格を得ることができたのは、リンゼイの熱心な指導によるところが大きかったといわれている。あとでエディンバラ大学の自然哲学の教授になったロバート・ステュアート Robert Stewart(?) もそうした親友のひとりだったし、またずつとステュアートの同級生だったロバート・ダンダ

ス Robert Dundas も、学生時代には大の仲良しであった。ロバートは後年、高等民事裁判所長官となった人、「ハリー九世、スコットランドの無冠の帝王」とよばれたヘンリーは、彼の異母弟である。ロバートと、またダンダス家とステュアートとは、遠からず宿命的な対立の関係に入るのであったが、大学時代のステュアートは、しばしばダンダス家に泊りにゆき、ロバートの父(当時下院議員、のちに高等民事裁判所長官)のお気に入りだった。

ステュアートを識る誰もが口を揃える彼のあたたかで anti-Bible な人柄と豊かな才能とは、その時代の最高の人物たちを、友人としてひきつけていたのであった。

(1) ステュアートの所領、グッドトリーズを訪ねてみた。い、とは、日本を発つ前からわががっていたことであった。ところが古地図のコレクションで知られるエディンバラ市立図書館で十八世紀の地図を見せてもらっても、地名辞典を当たっても、どうもみつからない。私はほとんど探索をあきらめてしまった。

私がよく通ったゴルフ場の一つに、リバートン Liberton があつた。優しい起伏と美しい眺望を持った、ややト

リッキーなコースである。ある夕方、友人と約束したスタート時間に遅れそうになって、ふだんは私のフラットから十ペンス払ってバスで行くところをタクシーにした。運転手のおじいさんに行先を告げると、Moreudunの手前のゴルフ場か、と聞く。エディンバラ弁の [mɔrdən] が聞きとりにくかったし、第一、そのモルダンがどこのか分らなかつたから、ギルマートン通りを行ってくれ、あとは私が教えるから、と返事した。

もうすぐ帰国という頃になって、ちよつとした必要から Robert Chambers, Biographical Dictionary of Eminent Scotsmen, 1856. のステュアートの項をひいてみた。なんとそこには、「グッドトリーズ（現在のモルダン）」とあるではないか。私はそれとも知らずに、「シーズンには三日にあげずステュアートのゆかりの地に通じつめていたのだった。モルダンはゴルフ場と全くの地続きであった。

ステュアートの『経済学原理』のなかで、貴族の子供たちが野うさぎやヤマウズラを父祖の領地で追い廻すところを描いている。おそろくグッドトリーズでの自分の経験を

—サー・シエームズ・ステュアートとマッキー教授—

想い浮べながら書いたのではなからうか。また実際、そのゴルフ場では、実によく野うさぎやヤマウズラに出遭った。いまのモルダンには高層の公営アパートが建ち、新興の住宅地としてひらけつつあるが、いまだに森と小川と丘に富んだ美しい土地であることに私は何か心安まる想いがした。

(2) Andrew Kippis, The Life of Sir James Stewart Denham of Coltness and Westshield, Bart. The Coltness Collections, 1842, p. 282.

(3) D. B. Horn, A Short History of the University of Edinburgh, 1967, p. 79.

(4) John Macky, A Journey through Scotland, 1723, p. 68. ただし、¹⁾ 誤のぞ、²⁾ E. C. Mosner, The Life of David Hume, 1954, p. 38. ならぬ誤に³⁾ せよ。

(5) Kippis, *ibid.*

(6) Anecdotes of the Life of Sir James Stewart Baronet. Stewart's 'Works' vol. vi, 1805, p. 363.

(7) Kippis, *ibid.* モスナーは「ロケットがすでに Professor Robert Stewart に自然哲学を教わった」と書いてる

のことだし、カーライルにも一七三七年に同教授の講義を受けた時には、*'he was worn out with age'* (The Autobiography of Dr. Alexander Carlyle of Inveresk, 1722-1805, ed. by J. H. Burton, 1910, p. 52.) とも描写があるから、キッピスの方が何か感ちがいらしているのかも思うが、このくいちがいに気づいたのがエディンバラを離れたあとなので、いま確かめるすべがない。

(8) Kippis, *ibid.*, p. 293. また Elisabeth Mure (ヌテムートの妹) から Mrs. Calderwood Durham から 20. Dec. 1781 の手紙を見たら Paul Chanley, Documents relatifs a Sir James Stewart, 1965, pp. 115-17.

二 エディンバラ大学の教授たち

エディンバラ大学は、一五八二年の創立で、スコットランドの諸大学のうちでは、もっとも歴史の浅い大学であった。しかし名譽革命セツルメントの一環として、剛直なウィッグのカーステアーズ William Carstares が一七〇三年に学長に就任し、積極的な大学の改革と拡充に着手して以来、スマウトの言うと

おり、エディンバラは、スコットランド諸大学の「ベースメイカー」になっていった。⁽¹⁾

カーステアーズは、自身エディンバラ大学を卒えたあと、グローニンゲンとユトレヒトの大学に学び、さらに政治亡命中、オレンジ公ウィリアムに仕えて長くオランダに暮した人であった。彼がその長いオランダ体験にもとづいて、一七〇八年に断行した *regent system* の廃止は、改革のひとつの要であった。

regent system というのは、「ひとりの教師 *regent* が、自分の学級に属する学生に学部的全教科を持ちあがりて教授し、指導する」という古風なやり方であった。エディンバラは、他の諸大学にきぎかけて、もっとも早くにこの不合理な方式を、近代的な教授制に切りかえたのであった。⁽²⁾ やや意外にも、神学部がすでに十七世紀末に事実上教授制を実施していた (Horn, *ibid.*, p. 40.) という下地が円滑な移行を助けたのかもしれない。

講座の増設と平行した専門講座間の分業体制の整備は、予科課程をも担当する Arts and Sciences 学部 (文理学部、あるいはむしろ教養学部と訳すほうが、やや実体に近い) からはじまり、ついで法学部、そして医学部の大拡張へとつながってゆく。教授の採用に当たっては、思い切って若い有能の士を登用

したし、有望あるいは大物と見れば進んで他大学からこれを迎え入れた。数学のマクローリン Colin Maclaurin と、科学者一家のグレゴリー家のひとり、医学者のジョン John Gregory はアバディーンから、時期は少しあとになるが、カレンやブラックはグラスゴウから引き抜かれてきて、いずれもエディンバラの看板教授になった人たちだった。不成功には終ったけれども、ハチスンを迎えようという運動さえあったのである。

こうしてステュアートが学んでいたところのエディンバラ大学は、早くもスコットランドはおろか、ヨーロッパ全体を通じても第一級の学府に数えられるようになっていた。⁽³⁾ またスコットランド諸大学のなかでは、ずば抜けて規模の大きな大学へと成長しつつあった。

さて、ステュアートが、カレッジ時代の四年間、どんな教育を受けたかは、一応知っておきたい問題であるが、大量に残されているエディンバラ大学の記録類を探せばともかく、いまのところ彼のカレッジ時代の足跡を証する資料は公表されていない。ステュアートの甥にあたるバカン伯の前出 Anecdotes⁴⁾、ただ「慣例によってきめられた期間、語学や哲学の教養をさずけられた」とするのみである。

そこで学部の講義編成の側から見てゆくしかない。この当時にカレッジ生のために開かれていた教科は、(一)ラテン語、(二)ギリシャ語、(三)論理学と形而上学、(四)自然哲学、(五)気学と倫理学 Pneumatics and Ethics (or Moral Philosophy)、(六)歴史学、(七)数学で、通常はそれぞれに専任の教授が配置されていた。右の諸教科のうち、(一)から(三)までは「基礎的」教科とよばれて必修課目とされたらしい。数学は明らかに選択課目とされていたが、ヒュームやカーライル、少しあとになるがボズウエルの受講の仕方を比較すると、(四)以下はどれも選択課目であったように思われる。モスナーは、一年でラテン語、二年でギリシャ語、三年で論理学と形而上学、四年で自然哲学という教科と受講順序を制度的に固定されたものと考えているが (Mossner, *Ibid.*, pp. 38-9)、実は先述の改革以来、学生は自分の好きな順序で好きな講義をきく自由を与えられていたのであって、たとえばステュアートがカレッジを了えて法学部に進んだ直後の一七三一年には、(三)の論理学と形而上学の初級(一年次)クラスに出席していた学生の半分は、それ以前にラテン語あるいはギリシャ語のクラスに出席したことのない者によって占められていた、という。そしてホーンは、この自由選択制こそが、カ

一ステアーズの大学改革のうちもつとも効果的だったものであつて、多くの優れた学生を国の内外からエディンバラ大学に惹きつけた要因だったとさえ論じている (Horn, *ibid.*, p. 41)。もつとも少数ではあつたが、マスター・オブ・アーツの学位を取つて正規の卒業 *graduation* を希望する学生に対しては、順序は別として必要教科の指定が行われたのである。

それぞれの教授の講義のやり方は、必ずしも一定の方式に従つたものではなく、受講する学生の数と教科の性質および範囲に応じて、異つた開講方式をとつていた、と思われる。たとえば、ある老年の教授の場合には、初級と上級の二つのクラスしか持たず、それも欠講がちだったというのに、人気の高かつたマクローリンの場合には、初級から上級へと内容の異なる四段階のクラスを持ち、一クラスの学生数が百人にもなつてしまう年には、初級(一年次)クラスをさらに二つに割つて、計五クラスの授業をしていたことが分つている (Chambers, *ibid.*, vol. iii, p. 534)。また歴史学は、*Universal Civil History* と *Roman Antiquity* の二本立ての講義で、それぞれに程度のうちがう二ないし三クラスが置かれていた。

これらの正規の講義のほかにも、いわば特殊講義のような形

で、各教授たちの *private class* が設けられた。学生たちは、それぞれの志望に応じて、その学年に受ける正規の講義と特殊講義を組み合わせながら決めていった。時代は少し後になるが、その間の事情は、前出カーライルの自伝によつて具体的に知ることができる (Carlyle, *ibid.*, pp. 35 *passim*)。いずれにせよ、今日の日本の大学とくらべると、スタッフの数も学生数も少ない上に、授業を通じての教授と学生、学生相互のつながりが実に濃密なことに驚かされる。

カレッジ時代にステュアートが教つたと思われる教授たちのうちには、ステュアートの後年の思想形成に影響があつたと推察できる人たちが少くない。

ステュアートは、スコット教授 *William Scot* からギリシャ語を学んだ。もともとの講座は、しばしば *Greek and Philosophy* と呼ばれていたように、ただギリシャ語を語学として教えるだけのものではなかつた。哲学を中心としたギリシャ思想を学ぶことも大切な眼目とされていたのである。その上、スコット教授自身は、長年にわたつて自分の本来の関心の対象だった倫理学のポストに移りたいと希望して、一七二九年にその望みを実現した人であつた。また一七〇六年ころ、自然法学の

講義（おそらく *private class* で）を行ったことがあり、そのテキストとして使うためにグロティウスの *De Jure Belli ac Pacis* のアブリッジ版を編纂した経験も持っていた。そして法学部の自然法学の教授に応募して果さなかったとも言われる（*Mossner, ibid., p. 41.*）。ただの語学の授業にとどまらなかったことは明らかで、後年のステュアートの広い古典学の教養に土台を与える役割を果たしたと推測される。

後に軍医総監として軍事医学の創設者、国王の侍医となり、また王立学会の会長までつとめた超大物のプリングル *John Pringle* にステュアートが教わったか否かは明らかでない。モスナーは、プリングルが一七二九年に前任の教授のあとをついだ、としているが、プリングルが気学および倫理学の教授（それも *joint professor*）に任ぜられたのは、数年あとの一七三四年のことである。伝記辞典も *DNB* も、一七二九年にはプリングルがオランダに留学中だったと思わせる記述をしている。しかしもしモスナーが正しければ、ステュアートには、「*Civil Government* の起源と原理」についても論じたというプリングルの講義を聴く機会は与えられていたはずである。

マクローリン教授の数学の講義にステュアートが出ていたか

—サー・ジェイムズ・ステュアートとマッキー教授—

どうかは、この科目が必修でなかったこともあって、確言できない。しかし二十一才の若さで王立学会の会員に選ばれ、ステュアートの入学早々に華々しく大学に迎えられたマクローリンの講義は、先述のように非常に評判をえていたというから、ステュアートが聴講したという確率の方がはるかに高かるう。マクローリンは、十五才という異例の若さで、グラスゴウ大学の *MA* を得るために行った公開の口頭試験の折に、「万有引力の法則」をテーマに選び、ニュートン理論を完全にマスターしていることを示して絶讃をほくした、という逸話の持主である。彼がアバディーン大学からエディンバラ大学に移るに際して決定打となったのも、彼の学識と才能を誰よりも高く評価していたニュートンその人の推薦状であった。

マクローリンの講義は、一、二年次クラスでの数学、幾何学にひきつづき、三年次ではニュートンの『プリンキピア』にもとづいて天文学を、ついでニュートンの流率法（微積分法）を扱った。また特殊講義では、天体望遠鏡を用いての天体観測をも課したという（*Chambers, ibid., vol. iii, p. 534.*）。

マクローリンと *Arts and Sciences* 学部もさることながら、エディンバラ大学全体が、ニュートン自身が属していたか

ンブリッジ大学以上に、この当時「新哲学」とよばれたニュートン理論の導入と普及の拠点になっていたことは注目すべきである。グレゴリー一家はその典例であった。ケンブリッジで「あわれな連中が、不面目にもデカルト流のありもしない憶説にしがみついている」頃に、エディンバラでは、グレゴリー一家が、ニュートン哲学の諸部門を学生に講義し、試験もしていた、というウィiston William Whiston の言葉 (Horn, *ibid.*, p. 41.) は少しも誇張ではなかった。また自然哲学の前出ロバート・ステュアートも、デカルト主義からニュートン理論に転向した一人とされ、少くともわれわれが接することのできる三十年代末の講義プランでは、これまた『プリンキピア』をテキストとし、また実験をおりこんで完全にニュートン主義の立場に立っていることが明らかである。いずれにせよ、ステュアートのが、毎日、ニュートン哲学の空気を吸って育っていったことはまちがいない。

こうしてカレッジの課程を了えたステュアートは、一七二九年二月、法学部へ進んだ。その時彼は、大学の図書館に、スコットランド貨で六ポンド（英貨で十シル）というその年度ではもっとも多額の寄附をした (Anecdotes, *ibid.*, p. 363.)。

ステュアートにとって幸だったことは、一七二二年に行われた法学部の改革によって、公法 (Law of Nature and Nations or Public Law)・民法 (Civil Law)・スコットランド法 (Scots or Municipal Law) の三講座が確立していったことであつた。その上に法学部のこれら講義は、賢明にも Arts and Sciences 学部の一七一九年創設された歴史学 (Universal Civil History) と密接に関連して講義され、また受講されるべきものとされていたのである。

ステュアートは、ベイン Alexander Bayne 教授のもとでスコットランド法を専攻しながら、同時に歴史学を受講し、そこで担当教授のマツキーに親しく師事することになった。マツキーについては次節以下に譲ることにして、ベインについて言えば、彼は一七二二年、後にケイムズ卿が同じ職につき、またラディマン Thomas Ruddiman やヒュームがキーパーになつた Advocates' Library (現在の Scottish National Library) のキュレイターに任命された。同じ年に、先述のとおり大学にスコットランド法の講座が設けられ、彼はその椅子を獲得した。そして一七二六年までは、キュレイターの職をも兼務していたのである。彼はその一七二六年に、スコットランド法学史

上の古典のひとつに数えられる Sir Thomas Hope, "Minor Practicks" の自著の "Discourse on the Rise and Progress of the Law of Scotland and the Method of Studying it" を附して刊行した。ホープは、ステュアートに代つては母方の先祖にあたる。私にはこつていふ本の内容を理解する能力は皆無に等しいが、ヘインの筆になる部分は、まことにスコットランド法の Rise and Progress を概観する狙いのもと読みとれ、スコットランド歴史学派の歴史意識といふのが、ずい分と早くから育つていたのではなからうか、といふ感想を持つた。ヘインはさらに、講義のための小テキストと見られる "Institutions of the Criminal Law of Scotland", 1730. 及び "Notes for the Use of Students of the Municipal Law in the University of Edinburgh, being a Supplement to the Institutes of Sir George Mackenzie". 1731. の二著をも刊行している。後二者は、ちょうどステュアートがヘインのもとに学んだ期間に発行されており、ステュアートがこれらに依つて学んだことは確実である。なお最後の著書名に出てくるマツケンジーの本は、王政復古期にチャールズ二世とジェイムズ二世(七世)のために、スコットランドで辣腕をふるふ "Bluidy

Mackenzie" とよばれた法務長官の多方面にわたる著作のひとつ "Institution of the Law of Scotland", 1684 のことである。こゝには節を改め、マッキー教授とはどういふ人であったか、ステュアートに何を教えたのか、を見よう。

(一) T. C. Smout, A History of the Scottish People, 1560-1830, 1969, p. 447.

(二) この点詳しくは Alexander Grant, Story of the University of Edinburgh, 1884, vol. I, p. 261 passim.

クラスロウは一七二七、セント・アンドルースは一七四七、マバディーンは一七五四に教授制に移行したところ。

また Edward Topham, Letters from Edinburgh, 1774-1775, 1776, letter xxv xxvi, 特に二一〇頁を見よ。

(三) Nicholas Hans, New Trends in Education in the 18th Century, 1951, chap. i. 特に五頁以下を見よ。彼は、さまざまな角度から、十八世紀のスコットランド諸大学、とりわけエディンバラの優越性を論じている。たとえば DN B を素材に、十八世紀中に成年時代を過ぎた大学卒業の名士約二、五〇〇人を選び出して、これを出身大学別に分けている。オクスフォード八四二、ケンブリッジ七七七に

対して、エディンバラは三四三、他のスコットランド諸大学は合計して三〇七、オランダその他外国諸大学の総計は一二〇に過ぎない。しかもスコットランド出身者で高等教育の全課程をイングランドで受けたもの三名に対し、エディンバラの三四三名のうち少くとも一五二名はイングリッシュ出身者であった。

これを学者、科学者六八〇名だけに限ると事態は一層はつきりする。十七世紀には、オクスフォード五六、ケンブリッジ四一、エディンバラ六、他のスコットランド諸大学の合計八。ところが、十八世紀になると六〇、八五、七九、三二となる。

エディンバラの経済史学部では、秋の新学期に、スタッフと新入の専攻学生とのパーティをやる。一九七七年のその集りで、当時学部長だった *S. B. Saul* が皮切りのあいさつに立った。彼がこの数字をあげてエディンバラの光輝ある伝統を説いた時、スタッフばかりか学生たちまでニヤニヤしたところを見ると、よほどすり切れるくらい使いだまれた話であるらしい。

(4) 一七四五年にヒュームが求めて果さなかつたのは、こ

のプリングルの後任教授の椅子であった。

(5) Robert Henderson, A short account of the University of Edinburgh, the present Professors in it, and the several parts of Learning taught by them, "Scots Magazine" August, 1741, p. 372. ハンダーソンは、大学の図書館長で事務局長を兼ねていた人。この文章は、公式の大学案内といったもので、もっとも信頼しうる資料のひとつである。

(次号につづく)